

世界の巨大産業を変えたイノベーターの日本農業版を期待 EVの本質はイーロン・マスクそのもの

前回の補足。気候変動に伴う価値観の変化から、「みどり戦略」の進展を楽観的に期待したが、みどり戦略と自動車ケースは大きな違いもある。EV（電気自動車）は燃費が著しく安い（ガソリン車に比べ日本では1/2以下、中国は1/9）。脱炭素という価値観だけではなく、長期的には費用低下という要素が消費者の選好要因になっている。また、10年後はガソリン車は販売できない国も増えている（法律）。

EV普及は消費者にとってメリットがあるからだ。これに対し、今のみどり戦略は、補助金で誘導しようとしている。みどり戦略が環境負荷削減ではなく、「健康・安全」という要素を強調することが出来れば、自動車の「燃費安」という要素に匹敵するであろう。この条件が満たされたとき、みどり戦略の目標達成も保証されるに違いない。

さて、今月のテーマ。EVと言うとき何を想起するか。EV化の背景について、気候変動を考えることが多いであろう。筆者は米テスラ社 CEO イーロン・マスク（Elon R. Musk）という人物を考える。

先月号本欄で指摘したように、世界の自動車はこの2年、すごいスピードでEV化が急進展した。この巨大産業変革のバイオニアはイーロン・マスクである。

EV化の流れを創ったのはテスラ社である。米国市場の65%はテスラ、中国市場をリードしたのも上海に工場を持つテスラである。

世界の自動車産業は2.7兆ドル（350兆円）の巨大産業であるが、ここでガソリン車からEV化という大変革の引き金を引いたのがイーロン・マスクである。イーロン・マスクはわずか20年で、Amazonのジェフ・ベゾス氏を抜いて世界一の富豪にもなった。世界で最も革新的なリーダーの一人である。

EV化で自動車の世界を作り変えただけでなく、宇宙旅行や宇宙ステーションへの貨物輸送を行なう（再利用可能な宇宙ロケット開発）、民間で初めて人類を宇宙に運んだスペースX創設者、また太陽光発電などのビジネスで成功を収めるなど、イノベーターとして偉業を成し遂げた。

何度も失敗しながら挑戦しつづけ未来を創る人になった。早くから、「火星に行く」と言いだし、宇宙船「スターシップ」を開発した。「世界を救う」ことを夢見た少年だった。

イーロン・マスクは南アフリカで生まれた（1971年）。シングルマザーの下で育ち、若いころは貧しかった。母親の出身地カナダで林業やボイラー室清掃といった過酷な労働の日々を送ったのち、大学に進んだ。

母親の生き方がイーロン・マスクにも強い影響を与えたようだ。母メイが育ったのは冒険や探検が大好きな家庭だった。父親は小型のプロペラ機を保有し、家族でカナダや米国、欧州、アジア、オーストラリアを飛び回った。メイは両親に連れられて、「カラハリ砂漠」で“失われた都市”と呼ばれる古代都市を探す旅にも出かけた。

毎年冬に3週間程度かけて砂漠を訪れ、両親と子どもたちがそれぞれ方位磁針（コンパス）を持ち、野生動物を狩って食べることもあった。失われた古代都市を見つけることはできなかったようだけど。

母の「感性」が遺伝した。失敗を恐れない性格は、母親の影響が大きかったと思われる。また、貧しさに負けることもなかった。本人は「貧しくてもハッピーであることは、リスクを取る際に大きな助けになります」と振り返っている。

世界のトヨタはEV化に後れを取った。何世代にもわたって資産を築いてきたトヨタは、「埋没費用」（サンクコスト）の重みが違う。EV化に積極的になれなかったのではないか。イーロン・マスクは貧乏から出発しており、「失うものはない」。リスク愛好者、リスク・テイクであり、それがEVのバイオニアたらしめたのであるから、自動車のEV革命はイーロン・マスクそのものと言えよう。

農業の世界も同じではないか。世襲制の老舗農家よりも、新規参入組から億万長者が輩出している。日本農業界のイーロン・マスクは誰だろうか。分野ごとに挙げられよう。さらなる出現を期待して、イノベーションで農業界に貢献した人を表彰する「日本農業版イーロン・マスク賞」創設を提案したい。